

2009 年度中国語上級教育における実践報告

中山 文*，于 耀明**，山本 透江**，上田なおみ**
池田磨左文**，谷口 高志**

(2010 年 1 月 12 日受理)

はじめに

2006 年に共通教育機構で外国語科目設立から 3 年。今年、もっとも運営が懸念されていた上級クラスが立ち上がった。もともと 1000 人ほどいたはずの中国語の履修生のうち、2 年後も学修を続けている者がどれほどいるのだろうか。彼らは意欲を持って授業に向かってくれているのだろうか。ここで報告するのは実用中国語 I・II、中国語会話 I・II、中国語リーディング I・II である。それぞれ KAC と KPC で 1 コマずつ開かれている。

3 年前、筆者はこれらの授業についてシラバスで以下のように書いた。

第 5 セメスター (3 年次前期)・実用中国語 I、中国語会話 I、中国語リーディング I

実用中国語 I では、中国 (人) を相手にするビジネスマンにとって、不可欠な中国についての知識を学びます。中国 (人) と付き合う上で私たちの無知が引き起こす無用の衝突を避けるために、中国の社会、文化、歴史、習慣や中国人のものの考え方などを学びます。所詮言葉は道具であり、それを使うのは人間です。言葉だけが流暢でも、相手への尊敬のないところに望ましいコミュニケーションは生まれません。相手を正しく理解することが、あなたの語学力をさらに生かすためには必要なのです。この基礎の上に立って、中国語会話 I で話す・聞く能力をレベルアップさせ、中国語リーディング I で読む・書く能力を上げます。

第 5 セメスターの授業を終えるころには、普通の中国人が読んでいる新聞、雑誌、小説などを、辞書をひきさえすれば理解できるという読解力が身につきます。これらのプログラムを終えた夏休みに中国へ語学研修留学に行く学生は、例外なく帰国後飛躍的に力を伸ばし、中国への興味も強くなります。苦手だったリスニング力が進歩し、自信を持って中国語会話に挑むようになります。

中国語リーディング I の授業で身につけたボキャブラリーが、中国語会話 I で生きてきて、実用中国語 I で得た知識によってそれが中国人とのコミュニケーションにおいて有効に利用される。この 3 科目は有機的に結びつき、受講生の語学力を飛躍的にアップさせてくれます。この時期の終了時目標は中国語検定 3 級から 2 級レベルに設定しており、この授業には中国語を就職の武器として考える積極的な学生

* 神戸学院大学人文学部教授

** 神戸学院大学人文学部非常勤講師

が集まります。

ここで筆者が強調したかったのは、実用中国語という科目の位置づけである。この授業に対応する科目は独・仏・朝鮮語では最初から設定されていない。筆者はこの授業を単なる語学の授業ではなく、ナマの中国を知るきっかけとなる授業として設定したかったのだ。

この授業について、担当者には中国語でメールが打てるようにすること、中国語で書かれたネットサイトにアクセスし、検索ができる力をつけることだけをお願いし、それ以上のことは担当者に委ねた。週1度の授業で中国の現状をすべて知ることなどできない。疑問が湧いたら、そのつど自分で検索する。社会にでて中国（人）相手に働くときには、その力が最も役に立つ。中国語リーディングと中国語会話では語彙力と応用力を高める。この3つの授業により、総合的に中国語の実践力が高まる、というのが筆者が描いた理想像だった。

この目論見はどのような結果を収めたのだろうか。ここに担当者による、各担当科目の実践報告を残したい。

I. 実用中国語 I・II

I-1 「KAC における実用中国語の課題と反省」

池田磨左文

1. 「実用中国語」科目開設の目的

神戸学院大学「実用中国語」は、2009年度、3年生を対象として新たに開講された科目である。

神戸学院大学では、初級外国語科目として中国語を選択する学生は少なくない。2年生以上で中国語科目を引き続き受講している学生は、初歩的かつ不完全であるにせよすでに一定の中国語を習得した、あるいは習得しつつある学生である。

ところで、私たちは学生に中国語を教える一方で、学生が中国語を生かして中国に関する情報を得たり、中国の状況を理解したり、中国のことについて積極的に発信したりすることのできるような方策を彼らに授けることができているだろうか。筆者は1年生を対象とする「初級中国語」、および2年生を対象とする「中級中国語（検定クラス）」の授業も担当しているが、自分の担当する授業に限って言えば、それに成功しているとは言い難い。多くの学生の中国に関する知識の少なさや関心のなさについてはしばしば伝聞するところであるし、また筆者自身の実感するところでもあるが、学生が中国語を活用できていないとするならば、私たち中国語を教える立場の人間もその職責を十分に果たしていると言うことができない。

「自分たち中国語教師の仕事は学生に中国語を教えることであって、学生に中国語を活用させることにまで責任を負わされてはかなわない」という声も聞こえてきそうである。しかし、そうであろうか。

神戸学院大学の中国語科目は専門科目ではなく、いわゆる教養科目として位置づけられているものである。神戸学院大学から学生や授業担当者に配布されている冊子に、次のような記載がある。

共通教育を学ぶねらいは、二つあります。ひとつは、急激に変化し対立と混迷を深める世界情勢の動きを広く大きな立場から読みとる力を身につけること、そして、もうひとつは、新しい基礎知識を積み上げて着実にワンランク上の自分を築くことです。このふたつは、いわば車の両輪のようなもので、いずれの学修が不十分でも、大学生として大きく伸びていくことは期待できません。(神戸学院大学・共通教育機構『共通教育はやわかり 2009』p.5)

同冊子によれば、中国語科目は1年次から3年次を通して「リテラシー科目群」に属する「外国語分野」の一つとして位置づけられており、「外国語分野」を含む「リテラシー科目群」の「到達目標」は「大学での学修に必要な基礎的な技能や教養の修得」・「社会人として必要な基礎的な思考力・実践力の修得」とある(同上、p.10)。中国語科目を含めた外国語科目が神戸学院大学においてこのように位置づけられている以上、神戸学院大学で中国語を教える私たちもそのことを十分に意識しながら教育を行なっていくべきである。

「実用中国語」はまさにそのことを念頭に置いて開設されたものと筆者は理解している。神戸学院大学で中国語科目を初級・中級と履修した程度では、学生がそれを活用して中国に関する情報を得たり、中国の状況を理解したり、中国のことについて積極的に発信したりすることは容易ではないだろう。しかし、その状況でも、私たちは学生が中国に関心を持ち、中国への理解を深めるように仕向けていかなければならない。その努力がなければ、神戸学院大学における中国語教育は意味を持ち得ない。

2. 教材とその使用方法

中級までの学習者を対象に週1コマの中国語授業を行なったところで、それだけによって実用に耐える中国語を学生に身につけさせることはきわめて困難であると考え、限られた条件の中で中国語の学力を無理に向上させようとするより、むしろ中国語を学習するための動機づけを中心に据えた授業を行なうことにした。そこで材料にしたのが中国で放送された連続テレビドラマである。これを鑑賞させることによって中国語学習への動機づけを行ない、さらには様々な問題に中国人がどのように対処しようとしているのかを知らせることができるのではないかと考えたのである。

『請讓我来帮助你』(何かお手伝いをさせてください)と題する連続ドラマが、2004年に中国中央電視台(テレビ局)で放送された。これは、中国共産党の青年組織である共産主義青年団と中央電視台(テレビ局)とが共同制作をし、共産主義青年団中央青年ボランティア行動指導センター・中国青年雜誌社・中国青少年オーディオビジュアル出版社が撮影を担当した、中国で初めてボランティアをテーマとした連続テレビドラマで、携帯電話

メール詐欺事件・毒入り調味料事件など中国の庶民が遭遇する問題をボランティアが周囲の人々を巻き込みながら解決していくという筋書きである。その VCD を教材に使用した。

ドラマ 1 篇の放送時間は約 45 分間、それぞれに 1 つのエピソードが描かれており、全 18 篇から成る。4 回の授業を 1 つの単位とし、3 回の授業で 3 篇を鑑賞したあと、1 回の授業の中でレポートを作成し提出することを求めた。レポートは授業の中で完成させることとし、宿題にはしなかった。前期の実用中国語 I で前半の 9 篇、後期の実用中国語 II で後半の 9 篇を見ることにした。以下、『シラバス』から授業計画を抜粋する。

実用中国語 I

講義番号	主題	内容
1 回目	導入	ドラマ内容の紹介とコンピュータで中国語を扱う方法の指導
2 回目	第 1 集	「胡同 (フートン)」にボランティアステーションが来た
3 回目	第 2 集	ボランティアを募集する
4 回目	第 3 集	献血で人助けをする
5 回目	第 1 集から第 3 集までのまとめ	レポート作成・提出
6 回目	第 4 集	リストラされた課長、職探しをする
7 回目	第 5 集	携帯メール詐欺犯を捕らえる
8 回目	第 6 集	女性を狙う誘拐犯を捕らえる
9 回目	第 4 集から第 6 集までのまとめ	レポート作成・提出
10 回目	第 7 集	旅行者を「胡同 (フートン)」に案内する
11 回目	第 8 集	「かんしゃく」持ちのおじいさん、ボランティアになる
12 回目	第 9 集	老先生、娘がボランティアとしてチベットに行くのをゆるす
13 回目	第 7 集から第 9 集までのまとめ	レポート作成・提出
14 回目	まとめ	Celeb に上げられたレポートを全員で検討する

実用中国語 II

講義番号	主題	内容
1 回目	導入	ドラマ内容の紹介とコンピュータで中国語を扱う方法の指導
2 回目	第 10 集	何世代にもわたる「かたき」同士、ついに仲直りをする
3 回目	第 11 集	「ニセ」ボランティア、人助けをする
4 回目	第 12 集	被災地に贈った救済物資に「ヘソク

		り」が入っていた
5 回目	第 10 集から第 12 集までのまとめ	レポート作成・提出
6 回目	第 13 集	都会生活に疲れた女性、山村の貧困地区に行きボランティア教師になる
7 回目	第 14 集	「毒入り調味料」、騒動を起こす
8 回目	第 15 集	姑は嫁を思い、嫁は姑を思う
9 回目	第 13 集から第 15 集までのまとめ	レポート作成・提出
10 回目	第 16 集	菜食主義の日本の子供に動物保護の本当の意味を悟らせる
11 回目	第 17 集	ボランティア精神、「カネの亡者」の心を動かす
12 回目	第 18 集	旅立ちと別れ
13 回目	第 16 集から第 18 集までのまとめ	レポート作成・提出
14 回目	まとめ	Celeb に上げられたレポートを全員で検討する

1 回 90 分の授業を、次のように構成した。

- (1) 『新華網』に載った 1 篇ごとの梗概に筆者がピンインをつけたものを印刷して配布し、これを筆者が解説した上で、全員で一通り発音する。
(梗概の出所 : http://news.xinhuanet.com/ent/2004-06/22/content_1539359.htm)
- (2) ドラマを鑑賞する。台詞については筆者が同時通訳や逐語訳を行なう。事件やその背景について筆者が適宜解説を加える。また、台詞中の語句や表現のうち、興味深いと思われるものを筆者がいくつか取り上げて説明を施す。
- (3) 各単位 4 回目の授業では、それまでに鑑賞した 3 篇から興味を覚えた事件やエピソードを学生が自ら選び、主に中国語で書かれたホームページをたどりながら自分の感想をまとめて、レポートとして提出する。

3. 課題と反省

テレビドラマを鑑賞することによって中国語を学習するための動機づけを行なうとともに、様々な問題に対して中国人がどのように考え、対処するかを知ってもらおうと思ったのだが、その目論見はもろくも崩れた。

受講者が少なかった。履修登録をした学生が、前期の「実用中国語Ⅰ」では 6 人、後期の「実用中国語Ⅱ」では 5 人しかいなかった。前期の授業では、かなり早い時期から受講者が 2 人になり、最後まで受講して期末試験を受けたのもこの 2 人だけであった。後期に至っては、授業に出席している学生は 1 人しかいない。結局レポートを全員で検討することもできなくなり、ただドラマを鑑賞するだけになってしまった。これでは学習効果を検証することも不可能である。

前期・後期を通して授業に出席し続けている学生は 1 人だけになってしまったが、幸いなことにその学生からは中国語の習熟度に一定の向上が見られる。毎回、ドラマを鑑賞す

る前にその梗概を読んでいるのであるが、全 18 篇の梗概は字数にして 4700 文字を超える。教材用に書かれたものではないこれだけの量の「ナマ」の中国語を読んだのは、この学生にとっておそらく初めてのことであろう。読み進むにつれて、音読が見違えるほど流暢になってきているのが認められた。

4. 結び

前期授業の 2 回目が終わったとき、ある学生が「くどい！」という一言を発しながら教室をあとにし、その学生はそれきり姿を見せなくなった。今となってはその言葉の意味を確かめる術もなく、推し量るしかないが、中国ドラマの台詞の情報量が日本のそれより遙かに多いことが、その学生に「くどい！」と言わせたのではないかと思われる。

筆者の同時通訳あるいは逐語訳がまずかったことも否定できないが、授業中の様子から判断すると、中国人同士の会話に含まれる情報量の多さそのものに拒絶反応を示したというのが本当のところであろう。中国人の発想そのものへの拒絶反応と言ってもよい。

教える側にしてみれば、そうであればなおさら引き続き授業に出席してドラマに向き合い、中国人の発想を正面から受け止めてほしかった。それが異文化を理解する第一歩なのだから。もしかしたら、中国や中国人・中国語とどのように関わるかという問題などではなく、自分とは異質なものを受け止める能力が低下している、あるいは異質なものを受け入れる容量が小さくなってきているのかもしれない。

学生にとって 2009 年度「実用中国語」の教材や授業方法は、日本人の口に合うようにアレンジされた中国料理しか食べたことのなかった学生にいきなり本場の中国料理を、しかもフルコースで食べさせようとするようなものだったのかもしれない。学生の拒絶反応を責めるわけにもいかない。拒絶反応が出ないように配慮すべきであった。その配慮が授業担当者の筆者に欠けていたというのが、一番の反省点である。

I - 2 「KPC における実用中国語の現状と課題」

谷口 高志

1. はじめに

KAC と同様、KPC でも今年度より「実用中国語」の授業が開講された。新たに始まる講義ということで、学生がどれほど集まるか不安であったが、果たして履修登録者は計 7 名に止まり、そのうち継続的に授業に出席し続けたのは 6 名であった。少人数で授業を行えるというのは利点も大きいですが、来年度はより多くの学生の参加を期待したい。

本講義の目的は、中国語の学習ではなく、今の中国の有り様を知ることである。現代中国に関する様々な話題を提供し、中国についてより深く考える契機となるよう授業を行った。2004 年、中国でゴールデンタイムに放送された連続ドラマ「請讓我来幫助 (ni)」を観賞し、その解説を通じて中国社会の現状を学んでいくことを授業の縦軸としたが、ドラマの主内容から脱線したこともしばしばあった。時には一人っ子政策や改革開放政策、天

安門事件（2009年は事件発生後20年目という節目の年であった）といった政治的な問題を学生たちに考えてもらい、また時には、中国における「点菜」の仕方や、旅行計画の立て方といった実用的な課題に取り組んでもらった。硬軟の話題を取り混ぜることで、中国に対する関心が幅広いものとなるよう考えたためである。

2. 講義の特色と現状

この講義の大きな特色は、毎回、PCが完備された情報処理室で授業を行うという点にある。PCの使用は授業を進めていく上で、想像以上の利便性をもたらしてくれた。授業で取りあげた言葉をネット上で検索し、記事や画像、動画の閲覧を通して自力でその意味を調べる、という課題をしばしば与えたが、「百度辞典」や「維基辞典」などに記載されている文章を読めば比較的容易に言葉の大意を理解することができる。もし記事の文章をいまひとつ理解できなかつたとしても、簡単な言葉であればそれに関する画像や動画を探し当てさえすれば、たちどころにその内容を把握できてしまうのである。

こちらがある言葉に解説を加える際にも、記事だけでなく、画像や動画を大いに活用した。例えば「集体相親」について説明したとき、体育館で男女の一群が逆方向に進んでいく現場の動画を見せたが、これは学生たちにとってかなり衝撃的だったようである。また、北京への旅行計画を立ててもらった時などは、先ず上海からの電車の「車次」や「票価」を調べ、その後写真を閲覧しながらホテルや観光地を選ぶといったかたちで課題に取り組ませたが、このように、自分たちで探し得た情報を取捨選択しながら1つの計画を組み立てていくという学習の仕方も、PCがあればこそ容易に可能となるのである。

勿論、ネットはその情報の信憑性、現実性など多くの問題をはらんでいる。だがそれらを差し引いたとしても、ネットの使用が今後中国を知るための重要な窓口の1つであり続けることは間違いない。ネットの有用で安全な使い方を伝えていくことが教員の側の責務となるだろう。

なお、初回の授業で、「雅虎（中国版 yahoo）」のメールアドレスを取得してもらい、それ以後は、授業で出した課題について学生たちが自ら調べたこと、考えたことを授業中にメールで送信してもらうというスタイルを取った。そのメールの内容と期末試験の結果を総合して、各学生の評価をつけることとした。

どのような期末試験を行うべきか、これも悩みどころであったが、結局、中国語のサイトを閲覧したり、メールを使ったりする上で知っておきたい単語の意味を答える問題と、社会的・政治的な話題について記述する問題を出題した。

試験の結果と、授業改善アンケートなどを見て感じたのは、殆どの学生が今の中国の社会的・政治的背景について深く知りたいという欲求を持っているということであった。学生たちはこれまで2年間（ないしは1年間）中国語を勉強し続けてきたものの、そもそも隣国の現状についてあまり多くの知識を持ち合わせておらず、特に中国の近現代史についての知識は皆無に等しかった（恐らく高校の世界史の授業などで学習する機会もなかったのだろう）。だがそれ故に、急速に経済発展を遂げ、存在感を増し続ける中国についてしっかりと学びなおしたいという欲求もまた強いようである。

改革開放政策や社会主義市場経済に関してごく簡単な解説をただけでも、彼らは新鮮な興味を抱いてこちらの話を聞いていたように感じられた。もっとも、政治的な問題を取り扱うことにはある種の難しさがつきまとい、例えば「天安門事件」という語がネットで検索できないことを確認してもらった時には、さすがに多くの学生が中国への嫌悪感・不信感を覚えたようだったが、そのような負の側面も含めて中国の今を分かりやすく、かつ丁寧に説いていく必要があるだろう。

3. 講義の課題

今後の課題は数多くあるが、とりわけこちらが困惑したのは、授業を進める上で学生の語学力の不足をどう補うか、という問題であった。ネットで記事を探し当てても、ある程度の中国語の知識がなければ、それを理解することは当然できない。中国語でメールの文章を打つという課題に取り組んでもらっても、自動翻訳サイトに頼るばかりではあまり意味が無い。

中国語を活用することと中国に対する理解を深めること、この両立は思いのほか難しい。改革開放について考えてもらった際には、「不管白猫黒猫～」といった比較的理解しやすく記憶に残りやすいであろう文句を先に紹介し、中国語を通して中国を学んでいけるよう心がけたが、そのような試みがどの程度成功したか甚だところもとない。

また PC の操作そのものに不慣れな学生が何名かいて、中国語の入力方法や「雅虎」メールのログインの仕方などをなかなかマスターしてくれず、課題の進捗具合にずれが生じることが度々あった。今年度は受講者が少人数だったので対応できたが、受講者の数が増えれば更なる混乱が予想される。今後は、操作方法のマニュアルを予め作っておき、紙媒体でそれを配布するなどして改善を図りたい。

最後に。一口に中国を知ると言ってもこれはなかなか容易なことではなく、授業時間内にできることも限られている。結局のところ、授業での学習を通して、中国のことを自発的に知ろうという意欲を持たせること、新聞や Web 上で中国に関する記事を見かければそれが何であれ先ず読んでみようというという好奇心を育ませることが、この授業が目指すべき到達点だと思われる。そのための試行錯誤を今後も積み重ねていかねばならない。

II. 中国語リーディング I・II

II-1. 「KAC における中国語リーディング I・II の授業運営報告」

山本 透江

2007 年度から 3 年目を迎える共通教育機構に、新たに開講された 3 科目のうち、当講義は「読解力の向上と中国へのさらなる理解」を主目的としており、KAC での受講者は 6 名、前期は進度・試験共に KPC と同じである。

授業進行はシラバスに従いながら、以下のようにした：

(1) 教科書『天津ダイアリー』内容に沿った講義・学習

「日本人留学生の日記文」「文法解説」「小会話」「練習問題」という構成で、文法解説を行ったのち、分量の多い「日記文」は事前に毎課ごと4名に割り振り、訳出させた。

(2) 時事・文化などについての補足解説

天津市・南開大学での留学生生活を題材にした教科書ということもあり、関連事柄や周辺地域での状況などを紹介した。

(3) DVD鑑賞（毎回20分程度）

国内の地域・民族・文化など多岐にわたる素材を扱った映像を鑑賞した。受講者は、日常生活に関わる題材に興味集中していたようであった。

2007-2008年度の成果で、発音や読解力は確実に向上している。ピンインは正確に読みこなせているし、まとまった文章や会話にあたって、細かい語彙の知識や予習がなくとも、前後の文脈で何とか読みこなせるだけの地盤もでき始めている。予習の要求は「わからない単語があれば」のみ。前期に関しては、出席率も安定していた。

後期は、11-12月にかけて3年生向けの就職ガイダンス等行事が重なり（水曜4限）、授業が成立しない日が出てしまい、その多くを自習やレポート提出に代えざるを得ず、進度もシラバス通りに行うのは困難となった。よって副教材として『アクティブ中国』（朝日出版社）の「農民工（農村部から都市部への出稼ぎ労働者）」「白領階層（都市部の年収の比較的多いホワイトカラー）」をテーマとした文章を読み、中国の都市部の現状を解説した。

今後も受講者の要求に応えうる授業を提供し続けるのは、この3年次相当開講科目の課題ではなかろうか。

II-2. 「KPCにおける中国語リーディングに関する授業報告」

上田なおみ

1. はじめに

3、4年生を対象とした中国語のリーディングの授業を受け持ち、そのリーディングの授業内容を考えて欲しいとの依頼があった際、神戸学院大学での中国語の授業の中でリーディングの授業をどの様に位置づけようかとされているのかと問い合わせた。すると、「最終目標は中国語を話すようになることであるが、その話すようになるためにはきちんとした文章を読まなければならない。きちんとした文章を読む、そのような授業にしたい。ただし、教材を選ぶ時は漢字のみではなく、ピンイン付きの教材でなければならない」との回答があった。私はその意見になんら反論する余地もないので、即作業に取り掛かった。

まず授業目的は、話すことが最終の目的なのであるからやはり文章は音読できなければならぬまいと考え、文章を読解し、その文章を読み・声調共に間違えずに詰まる事なく音読することと決定した。次にテキストを選定した。その選定条件として、文学的・情緒的な文体で書かれたものではなく、文法的に説明が可能で明瞭な文章であり、内容は学生に身

近な題材を取り上げ、350 字程度で書かれているものとし、さらに対話の文章及び練習問題があり、1 年間で 1 冊終わるものとした。そして評価方法についてである。評価の割合は平常点 30%、テスト 70% とし、平常点は会話ではなくきちんとした文章を詰まる事なく読むことを目的としているので、発音テストと称し、半期に 2 回ずつ使用テキストの本文の中から各自で選択させ、朗読を実施し、ピンインの読みに間違いがあるか否か等で採点し、その点数を平常点とした。以下では、以上の条件の下で授業を進めた結果に対する所見を述べていく。

2. 授業の現状について

さて実際の授業の様子に関して述べていく。履修登録者は 5 名であるが、5 名のうちで出席者は 3 名で、その 3 名のうち 2 名は全出席と、熱心な学生に囲まれて授業を進めることとなった。授業は、テキストが 8 課で構成されていたので、2009 年度シラバスに紹介されている様に、3 週間かけて 1 課を進んだ。テキストの“復習”や“ポイント”の説明及び例文の日本語訳に関しては教える側が一方向的に講義をするが、“本文”・“対話”・“練習問題”に関しては、次回の授業進行範囲を必ず予告し、予告した範囲を全て予習させた上で“次回”の授業時に指名し学生に担当させ、その箇所を中国語で読み日本語に訳すか、又は、問題に答えさせるという作業を繰り返した。学生が担当した箇所に関しては、文の構造の解読難により、訳に多少の間違いがあり訳せなかったとか、発音に慣れておらず読み方を間違える等と、初級事項の説明をすることもあったが、予告した範囲を授業時間内に終れないということにはなかった。

丁寧にはテキストを進めても、時間に余裕が生じたので、話せるようになるためには聴く力も持たなければならないとの考えと、学生から要望もあり、余剰の時間で中国語検定試験対策と称し、リスニングを扱うことにした。このリスニングでは、使用テキストの半分量、180 字程度に相当する文章を扱った。その進行方法は、リスニングで扱う文章の CD を流す前に問題を配布し、その問題より文章の内容を予め推測させ、その後、“文章→問題”の順で CD を 2 回流した。CD を 3 回目流す際には、プリントしたリスニング対象の文章を学生に配布し、その文章を参考にしながら進めた後、解答した。リスニングに関しては、正解率は 60% 程度であったが、単語の定着率が良くなく“意味”よりも“音”で答えを聴き分けているという印象であった。

また定期テストに関しては、テキストのみからの出題であると言い切っていたのも影響したのか、90 点以上としっかり勉強したという印象を受けた。以上で前期を終了した。

次に後期の授業に関して述べていく。授業の進め方は、3 週間かけて 1 課を進み“復習”や“ポイント”の説明及び例文の日本語訳に関しては教える側が一方向的に講義をし、“本文”・“対話”・“練習問題”に関しては、次回の授業進行範囲を必ず予告し、予告した範囲を全て予習させた上で“次回”の授業時に指名し学生に担当させ、その担当箇所を中国語で読み、日本語に訳すか、又は、問題に答えさせ、余剰の時間でリスニングを扱う等、前期と同様である。

しかし、学生の出来具合は前期と比べると、担当するテキストの日本語訳に関しては双

方とも修飾語の掛かる位置の取り違えが出る程度で、全く間違ふということはなく、リスニングに関しても180字程度の文章を終了した後、2言の会話に関するリスニングをすると8割以上の正解率と進歩が見られた。ただし、発音に関しては双方に少し違いが生じた。1人はピンインを見て読み方も声調も間違えることが少なくなり、詰まらずゆっくりと読めるようになり進歩が見られたが、もう1人はピンインの読み間違えや声調の取り違えが前期と変わらず、進歩が見られなかったのである。発音の出来具合に個人差が出るのは仕方のないことだと考えても、前期テストの結果からすると、前期に“読み・聴く”の繰り返しを双方とも同じように学習したのだから発音がある程度のレベルにまで達し、もう少し出来具合に差がなくてもよいと考え、各学生に今まで受講した中国語の授業について話しを聞いた。

発音に進歩が見られた学生は、「かなり音読させられました」と答えたが、発音の苦手な学生は、「初級の時に“ピンインが読めなくなるのでピンインに振り仮名を打ってはいけません。私の真似をして下さい」と教えられ、音読することも少なく、今だピンインが読めない所が有り、発音することが至極嫌だ」と答えた。読めないのにどの様にして日本語訳をするのかと不可思議に感じたので、再び発音の苦手な学生に質問すると、「日本語訳は漢字のみで訳している」という返答であった。発音の良くない箇所及びピンインの読めない箇所は日本語訳の出来具合も良くないので、「今からでも遅くないので、読めないピンインには振り仮名を打ち、その読めないピンインが読めるようになれば振り仮名を打たなければ良い」と指導した。発音の苦手な学生は努力していた。

3. まとめとして

中国語で話せるようになるために中国へ留学する人が多いが、留学に頼らないで話ようになるためには、多くの中国語の文章を読み、多くの中国語を聴き、口にするしか方法はないであろうし、さらに中国語の力を伸ばすには中国語を多く聴き、中国語の文章を多く読むことしか方法はないと常々考えている。

最近我が母校のいわゆる“OB会”に参加する機会があり、その際ある商社を定年退職され中国語が話せる方が、「中国語を上手くなろうとすると大学1年生の時に使用したテキストに戻っている」と話されていたが、リーディングの授業においても、初級時で学習している発音が出来ない箇所は日本語訳も出来ないもので、やはり初級の段階で発音をしっかり身につけておかなければ、後の進歩は難しいと考える。留学せずに中国語を話ようになるには多くの中国語を聴き、多くの中国語の文章を読むという相当な労力が必要であり、時には「中国には方言が多くあり、勉強しても仕方がない」という意見も耳にすることがあるが、話されている言葉の中で、どれが中国語の標準語（普通話）で、どれが中国語の標準語（普通話）でないのか聞き分けられる能力を持つことだけでも充分意義があると考えられる。リーディングの授業が、その能力を持つための役割を果たせ、異なる分野の方々にも納得される様な授業になることを期待する。

Ⅲ. 中国語会話 I・II (KAC・KPC とも)

于 耀明

1. はじめに

この授業の概要をシラバスから引用する。

講義名 中国語会話 I・II

テキスト 黄 漢青・杉野 元子著『大学生のための現代中国語 12 話・II』（白帝社）

教員名 于 耀明

講義の主題と目標

この授業は中級中国語を終了し、更に中国語会話の力をステップアップしようとする 3 年生の諸君のために、用意した課目である。会話の授業に参加することで、これまで身につけた中国語をいっそう磨き、ネイティブの講師と会話をし、意見を述べ合って、確実に中国語のコミュニケーションの力を伸ばしていく。テキストの各課にはさまざまな人物が登場して、家庭、学校、職場などの場所での会話を展開している。会話の文には日常よく使う表現や語彙がたくさん盛り込まれている。単に語学の勉強をするだけでなく、会話を通して現代中国に暮らす人々の考え方や価値観、悩みや本音などを知り、現代中国の文化、社会についての関心と理解も深めていく

2. この授業の成果、問題等

アンケートで見たところ、この科目の受講者の受講動機と目標は非常にはっきりしていて、勉強の意欲も強いことが印象的である。1 年間の勉強を通して、受講者からは「実用的な会話の文句が学習できて良かった」「会話をしっかりやっている」「少人数なので効率良くできた」「中国語を生で聞く機会ができて非常に良かった」「楽しく勉強ができた」「中国についての話も聞けるので楽しむことができた」「会話の練習だけではなく文化についても知ることができた」と評価されている。学生の評価を力に変えて、次年度からでもいっそうの教育効果を求めるべきだと考えている。

この科目は本学の中国語教育としての上級科目なので、受講者の中国語会話の力をどうしても伸ばしてあげなければならないと思い、4 月から気合を入れてやり始めたのだが、選択科目の性質もあったと思うが、勉強が少しくついと感じて辞めた学生がいた。その学生の友達を通して教室に呼び戻す試みをしていたが、実りはなかった。悔やまれる出来事だった。次年度から会話科目の教育にもっと工夫をし、学生が途中であきらめずに勉強を続けていけることにも力を入れていくつもりである。

終わりに

2009 年度、ここで報告したすべてのクラスで履修生は 10 名以下だった。予想していたとはいえ、やはりさびしい結果である。来年度以後もこの状況が続くのだろうか。総合企画会議（2007 年 2 月 10 日開催）了承事項として、開講科目の見直しについては次のよう

に定められている。

・単独開講科目の見直し

単独クラスで開講されている科目において、履修登録確定による2年間の実績履修者数が、2年とも10名以下の場合は、科目特性を考慮の上、統廃合を行うべく教務・入学センター所長と学部長及び機構長で調整する。

この規定によると、2010年の結果次第では上級クラスについて再考が迫られる。

本報告で分かるように、今年は試行錯誤の年であった。そして、担当者はみな真剣にその任に当たってくれた。特に実用中国語では、語学力アップとは異なる意識が必要のため、担当者はさぞやご苦労だったろう。だがたとえ少数とはいえ、多くの学生が落伍するなかで、このクラスのおかげで中国への興味を持ち、語学力を伸ばす学生がいたことは救いである。

ここで述べた3つの授業は、2009年度は3回生のみ対象だが、2010年度は3、4回生の2学年分が対象となる。これだけ意識の高い講師陣に恵まれているのだ。先輩から後輩への口コミによって、履修生の増加が望めるのではないかと期待している。

「学如逆水行舟、不進則退」（学ぶことは逆流で船をこぐようなもの、進まなければ流されてしまう）の言葉どおり、語学力を維持するのはたやすいことではない。初級・中級で身につけた中国語の基礎力を無にしないよう、中国への興味と親近感を与えるきっかけの授業としてこの3科目の授業を維持していきたいと考えている。